

身体的記憶が喚起する廃墟の記憶 — 朱天心『ハンガリー水』における眷村表象を中心に —

倉本 知明

はじめに

- 第1節 反共・愛国空間としての眷村
- 第2節 『ハンガリー水』執筆前後の台北
- 第3節 廃墟の記憶としての眷村
- 第4節 「人食いの履歴」を持つ「ほく」
- 第5節 被害／加害者関係を越えて

(要約)

1987年の「解嚴」とそれに続く台湾社会の本土化の動きは、眷村出身の作家たちにとって、眷村をめぐる表象の在り方に大きな再考を迫るものであった。デビュー当時から眷村出身の作家として多くの作品を発表してきた朱天心も、そうした再考を迫られた作家の一人であったが、果たして彼女が本土化のうねりの只中で再考し、描き出した眷村の姿とはいったいどのようなものであったのだろうか。

本論文では、1995年に発表された朱天心の中編小説『ハンガリー水』を中心に考察することで、かつての反共・愛国的な政治空間であった眷村を朱天心という作家がその理念の消失以降も敢えて取り上げ続けることの意義を、本土化運動が内包する暴力性への批判と省籍対立から和解へと到る可能性の提示といった二つの観点から読み解くものである。

はじめに

朱天心の作品が日本において翻訳されて以降、多くの研究者たちが『古都』を中心に様々な研究論文を発表してきた¹。しかし、朱天心のその他の作品群や『古都』収録中の他作品についての言及は必ずしも十分になされてきたとはいえず、それは『古都』というテキストの豊饒さがある意味で他作品を霞ませてきたためともいえる。とりわけ本稿で取り上げる『ハンガリー水』という作品は、匂いや音などといった身体的記憶が喚起する無意識的な記憶の想起といったブルーセントのモチーフをふんだんに用いた朱天心の代表作の一つでありながら、眷村という台湾独特の、しかし日本の台湾研究においていまだ十分に議論のなされていない領域を叙述の対象とするため、議論の難しい作品であった。

本論文では朱天心の中編小説『ハンガリー水』を眷村文学の一環として読み解く事で、かつて反共復国の前線基地としての役割を担ってきた眷村という過去が、本土化が急速な勢いで進行した1990年代の台北という都市空間においていかにして想起され、また表象され得たのかを考察する事にある。匂いや音といった身体的な記憶によって想起される過去が、主人公である「ほく」の心に引き起こす「恐怖」や「疚しさ」、そして自身が殺し、また食べてしまったのではないかと逡巡してやまない眷村人たちに対する一連の「加害性」について考察することで、かつて眷村人であった「ほく」が1990年代の台北という場において過去を想起する事の意味、そしてまたその表象を通じて眷村という過去を朱天心という作家が提起し続ける事の持つ意義について明らかにしたい。

第1節 反共・愛国空間としての眷村

1958年、朱天心は軍中作家朱西甯の次女として高雄鳳山にある眷村黄埔新村で生まれた。父朱西甯や文学的師でもあった胡蘭成の強い影響の下、早くから文学活動を開始した朱天心は、大学進学後は姉朱天文や馬叔礼、謝材俊らとともに文芸誌「三三集刊」²を立ち上げ、精力的な文筆活動を展開してきた。

彼女が作家としての活動を開始した1970年代から1980年代前半にかけての作品群を概観して見た際にまず気付かされるのは、作中に現れる多感な少女たちの内面世界に対する精密な心理描写であるとともに、そこに「愛国」や「反共」といった当時の政治状況を色濃く映し出した叙述が少なからず見受けられるということだ。

例えば、短編小説『梁小琪的一天(梁小琪の一日)』(1973)において、作者自身を模したと思われる主人公の少女梁小琪は、双十節に総統府前の介寿路において上演される盛大なマスメディアに言い知れぬ荘厳さを覚え、傍で昨夜のテレビ番組についてお喋りする学生たちに対してついつい怒りを覚えてしまうような愛国少女として登場している。介寿路を埋めつくすほどの青天白日満地紅旗の波が揺れ動く中で、彼女は「自身の臍の緒と国家の胎盤がきつく結ばれている事を」強く感じ、式典の帰りに「大きくなったら兵隊さんになって共匪をやっつけてやるんだ」と息巻く少年の姿を見て「明日にもやはり希望はあるのだ」と喜びの溜息をもらしている³。

また、長編散文『撃壤歌』(1977)において、朱天心自身を模したと思われる主人公の少女小蝦は、国民党の中央図書館へ孫文のポスターを買いに行った時の昂奮を熱っぽく次のように語ってみせている。

カウンターのお姉さんに一枚下さいと言うと、彼女はポスターを包みながら笑顔で、「教室に貼るのね?」とたずねてきた。「……」顔が熱く火照っているのが分かった。きっと私の顔は真っ赤になっていたことだろう。その時ふと昔、寇監督が言っていた事を思い出した。ある70歳になる老婦人はキリストの名前を聞くたびに、その頬は赤くなり、心が躍ったという。それはまるで彼女がまだ若かりし頃、将来の夫となる男性の名を誰かがふと口にした時に感じるものに似ていたという。きっと今の私もそうに違いない。真っ赤になって黙ったまま家に帰ると、それを机の前の壁に貼りつけ、ここから国父と共に生活を始めよう、共に革命事業に努力しようと思った。……勉強しなければ。これ以上サボってれば、国父はきっと私に眉をしかめるに違いない⁴。

ここに登場する小蝦にとって、国父とは「大中国」という信仰と、また「革命事業」という使命を想起させるための一つの偶像である。それは老婦人にとってキリストという名を聞くだけでその胸が躍るように、彼女にとって国父の名は神聖不可侵なものであり、「国父の三民主義を読み上げるたびに常に涙がこみ上げ」るほどの彼女の純粋な愛国心は、国父という名の共同神の苦心とその功績を不断に想起し続けることによって形成されたものでもあった。

しかし、朱天心のこうした愛国や反共を基礎に置いた「大中国信仰」とも呼ばれた叙述方式は、1980年代後半頃より徐々にその様式を変化させ始めてゆくこととなる。その変化を一言で述べるとすれば、それは叙述対象の変化にあったといえるだろう。それまで叙述の中心を占めていた梁小琪や小蝦のような愛国少女たちは徐々に作品の中から姿を消してゆき、代わってそれまでは顧みられる事が少なかった社会の周縁に生きるようなマイノリティたちが叙述の中心となり始めたのだ⁵。愛国や反共といったモチーフがすっかり影を潜めてしまったそれらの作品群を、詹宏志は朱天心作品における「断裂」として捉え、また邱貴芬はそれを朱天心の信仰に対する「幻滅」であったと述べている⁶。

「断裂」や「幻滅」以前におけるこうした朱天心の熱烈な愛国や反共への傾倒は、彼女が眷村という外部社会からある種「隔離」された空間において生活を送っていた事と切り離して考えることは出来ない。朱天心の作品において、眷村はしばしば登場しては物語のプロットを構成するある種の基調のようなものとなっており、陳国偉の指摘するように、そこには眷村に対する極端な「愛好」と「未練」に似た感情が織り交じっている。

しかし、彼女のこうした「愛好」や「未練」を形作ることとなった眷村とは、そもそもどのような場所であったのだろうか。

国防部史政編纂室が2005年に編集した『国軍眷村發展史』によれば、眷村とは「軍が軍心を安定させるために、軍人たちの家族を安置するためにつくられた集落」とある⁷。光復以降、大陸から渡ってきた外省籍の軍人、及びその家族たちの受け入れ先として台湾各地に建設された眷村は、抗日戦争から国共内戦へと撃ち続く戦乱によって家を失った外省人たちにとって、大陸の故郷へ帰るまでのある種の避難場所のような存在であった。「集中管理・集中居住」といった戦時動員体制を基礎に設立された眷村の多くは、軍の駐屯地に寄り添うように建設されていたが、渡台当初は大陸反攻までの一時的仮宿としての意味合いが強く、接収した日本軍宿舎などを継続して利用する事も多かったという⁸。

こうした国民党による管理保護の下で外部社会から隔絶された生活を送っていた眷村子弟たちの国家観を、朱天心は『小説家的政治周記』（1994）において、林正杰のインタビューへの答えを引きながら自らの幼少時代の心象へと重ね合わせ、次のように述べている。

一般的に、眷村で大きくなった子供たちは国民党に同一化し易く、それゆえに国民党とは即ち政府であり、また眷村の生活の全てが国民党の保護下にあるということから、それに反対するという事は自らの生活を破壊するという事を知っていた。小さい頃の私は愛国的で非常なほどに国家主義者だった。高校生の頃、朝礼で国歌を歌っている時にお喋りをしていたクラスメートたちを見つけた私は、朝礼終了後、すぐさま彼らをつかまえて口論をしかけて喧嘩になったこともあった⁹。

ここに登場する「わたし」は、かつて朱天心が描いた「自身の臍の緒と国家の胎盤がきつく結ばれている」と信じていた頃の梁小琪や、国父のポスターを買うために顔を真っ赤に火照らせて

いた小蝦の姿そのものだといえるだろう。

1950年代から台湾各地に誕生することとなった眷村の多くは、反共復国をその存在意義に置き、軍事的空間として台湾社会からは切り離された存在であった。国民党政府から官舎や生活物資を支給された眷村住民は、その代償として党に忠誠と戦力を提供し、このような関係性が後に軍人／国民党の利益共生状態を生み、眷村が国民党にとっての「鉄票区」であるという政治神話を生み出す結果にも繋がってゆくこととなった¹⁰。このような極度の軍事的、あるいは政治的空間において幼少時代を過ごしてきた朱天心は、確かにある意味で「自身の臍の緒と国家の胎盤がきつく結ばれて」いる状況にあったといえる。

しかし、1970年代末の郷土文学論争やその後の民主化運動に直面することになった朱天心は、邱貴芬が指摘するようにやがて信仰行為そのものから距離を取り始めることとなる。そして、一方では台湾社会の民主化や本土化の動きといったものを信仰行為の転置に過ぎないとして激しく批判し、廟に鎮座する信仰対象を敬虔に敬おうと主張する先達や仲間達の行為を「先の見えない道程」と述べ、「身を引き裂かれるような苦痛」とであると訴えている¹¹。

しかし、こうした「身を引き裂かれるような苦痛」を感じながらも、朱天心はかつて自らの臍の緒と国家の胎盤を結びつける媒介として機能していた眷村という過去を、そのテーマとして取り上げ続けている¹²。反共・愛国空間として戒厳令期の台湾に数多く建設され、また自身の「大中国信仰」の根源ともなった眷村という空間を、その「断裂」以降も朱天心という作家が執着し、叙述の対象として描き続けることにはいったいどのような意味があるのだろうか。そこには過ぎ去りし過去への「愛好」や「未練」といった個人的な郷愁感以外に、どのような意義があったのだろうか。

本論文では、朱天心がその「断裂」以降に眷村を作品のテーマの背景として取上げた『ハンガリー水』（1995）を中心に考察することで、以上の問いに対する解答の一助をなしたいと考える。

第2節 『ハンガリー水』執筆前後の台北

朱天心が『ハンガリー水』を執筆する前年の1994年、台北はその誕生からちょうど130年目の節目を迎えていた。劉銘伝の台北開城（1864）に始まり、大日本帝国によって近代的に整備された台北の都市制度は、それを引き継いだ国民党政権によって大きく拡張され、また1990年代以降には進展するグローバル化とそれに並行する本土化という政治的激流の波に晒されることによって大きな転換の時を迎えようとしていた。

その象徴的な出来事として、同年台北で行われた市長選挙では、陳水扁が野党出身者として初の台北市長に当選している。就任以降、陳水扁は市内全域への地下鉄の開通や大規模な下水衛生施設改築計画などを矢継ぎ早に発表し、また台北市の風俗景観政策にはとりわけ強い関心を持っていた。1997年には現在の林森公園にあたる14・15号公園一帯に広がる違法眷村群を「都市の腫瘍であり、市民の恥である」として強制排除を敢行し、国際ホテルが隣接する同地区の景観の保護に努めている。同公園は日本統治時代に日本人の共同墓地であったこともあり、陳水扁は「幾

千人もの人間が墳墓の上で生活しているとは信じがたい」¹³と述べて、それが市民の総意であるとして排除の正当性を述べている。

このような急速な変化の只中であって、朱天心たち眷村人がかつて抱いていたような過去の記憶は次々と様変わりする都市の相貌の中で幾重にも塗り重ねられ、また毀棄され続けてきた。そのため信仰と、それによって保障されてきた空間は眷村という過去だけに関わらず、「歴史」によって繰り返し語り直され、その残骸は開城130周年記念という輝かしい過去とは違った廃墟の姿として朱天心の目には映っていた。

長編小説『古都』（1996）において、主人公である「あなた」の目に映った台北という都市の光景は、どれも覚えている人などいないようならぶれたものばかりであり、眷村の姿もかつてそこに確かにあったはずのものとして「あなた」はその残骸を拾い集めるように娘に当時の状況を説明して見せようとする。

それだけでなく、いつだったか娘を連れて、あなたが小さい頃住んでいた軍人村（【引用者註；眷村】）を探してみようとしたこともある。村はさほど遠くない、城北の郊外にあった。ズラッと立ち並ぶ公団の団地の中で、遠くの山並みを頼りにおおよその位置を割り出し、もとの家がだいたいどこにあったのか見当をつけてみた。たぶん、コンビニ店の前の植え込みの辺りにあったはずだ。それから娘と一緒に子供の頃駆けずり回った野山にも行って見たが、驚いたことにその場所は五、六棟立ち並んだ醜悪なマンションに飲み込まれ、いまでは低い小山を残すだけになっており、何歩か歩けば簡単に踏み越せそうな感じだった。あなたは細い山道に立って、高速道路の排水路のあたりを指差しながら、あそこが犬を埋めた場所なのよ、と娘に説明してやった。あなたはあのときのトキワススキに覆い尽くされた秋の原野と、立ち上る農民たちの焚き火の煙、それから悲しみに沈んだ気持ちを何とか再現してみようとした。

犬はなぜかいつも秋に死んだ¹⁴。

台北のような変容著しい大都市において、眷村のようなかつての信仰が保障していた空間は次々と廃墟へとその姿を変え、人々の視覚から姿を消してゆく。「あなた」がかつて小さい頃に過ごしたという村も、いまではすっかり公団の中に飲み込まれ、思い出に満ち溢れていた家も「コンビニの前の植え込みのあたり」ではなかったかと推測するしかない。

このような中で、朱天心は『ハンガリー水』において、匂いという身体感覚を通じる事によって視覚からは既に失われてしまったような都市の廃墟の姿を嗅ぎ出そうとしたのだった。「ほく」が思い出そうとしながらなかなか思い出すことが出来ないでいる眷村の記憶は、その意味で1990年代の台北という都市において、廃墟の最も深い部分に隠された過去でもある。

林耀徳は幾重もの廃墟をその根底に隠し持った台北という巨大都市を「廃墟の上に廃墟を重ねた都市」とし、そのような拡張を繰り返し続ける台北という都市には歴史の亡霊達はもはやなんの御利益ももたらしてはくれないだろうと述べている¹⁵。台湾社会に「本土化」という新

たな政治的信仰が打ち立てられようとする中で、かつての信仰は地層のように都市の下に組み敷かれる。そうする事で台北という都市は、林耀徳の言うように「廢墟の上に廢墟を重ねた」都市として拡張を余儀なくされていくのだ。

また、彭婉蕙は1990年代以降の朱天心作品を都市文学としての風格を持つとしながら、『古都』から『漫遊者（遊歩者）』に到るまで、彼女が作品の中に描いてきた台北という都市には「事実」と「虚構」が交錯しており、都市は文学地景やテキストとしての空間であると同時に、作家自身の心理的変遷を反映するための叙述対象であったのではないかと指摘している¹⁶。

反共や愛国といったかつての信仰を放棄し、また「民主化」や「本土化」といった新たな信仰をも意図的に拒絶しようとする中で生まれてきた朱天心の心理的変遷を、もし仮に「廢墟の上に廢墟を重ねた」台北という都市の中に映し出すことが出来るとするならば、そこにはいったいどのような光景が広がっているのだろうか。そしてその光景の中に眷村という廢墟の最も深い部分に隠された過去はいかにして描き出すことが出来たのであろうか。

第3節 廢墟の記憶としての眷村

『ハンガリー水』において、朱天心は「ぼく」と呼ばれる平凡な外省人の中年男性を語り手として物語を進めてゆく。「ぼく」は、ふとしたことから匂いが記憶の底に沈殿した無意識的な記憶を喚起することを知り、同じく過去の失われた記憶を捜し求めるAという名も知らぬ男と共に台北の都市を徘徊してゆく事となる。外省人の中年男性である「ぼく」に対して、このAと呼ばれる男は、本省人であるという点を除けば「年齢、容貌、職業とも」「ぼく」とほぼ似通った存在として描かれている。しかし、「ぼく」はAについて多くを知らないし、また積極的に知ろうとする様子も見られない。しかしそれでいて「ぼく」とAの間には「まるで映画の中の賢者とその弟子、もしくはホームズと助手のワトソンみたい」な奇妙な関係が続いている。

あるパーティの席上で出会ったAは、「ぼく」の服に付いていた防虫薬、香茅油の匂いから、三十年前自身さえも忘れていたはずの伯母の記憶を思い起こし、見ず知らずの「ぼく」へと話しかけてくる。そして伯母と祖母の些細な確執について一方的に語り続けたAは、長らく記憶の底に沈滞していた伯母の匂い（＝伯母の記憶）を求めて、香茅油の匂いの付いた服を譲ってもらえないかと言って「ぼく」をひどく困らせる。「ぼく」はこれ以上Aと会うことを避けたいという思いから急いでその申し出を受け入れようとするが、Aの要求はそれだけにはとどまらず、より正確な匂い（記憶）を求めようと「ぼく」に次のように迫ってくるのだった。

それを聞くとAはほんとうに申し訳ないと言い、しかしその余勢をかって、できたらなにかぼくの洋服ダンスの中の、何でも構わないから不要なものをもらえないだろうか、と続けた。例えば使い古しのハンカチとか、ゴムが緩くなってもう捨ててもいいようなソックスとか——頼むから小さくて穿けないパンツなんて言い出さないでくれ——彼は太急ぎで弁解した。香茅油だけではなく、もうちょっとなにか複雑な白粉の香りも混じっている

らしく、それが合わさるとちょうどあの頃の伯母さんの匂いがするのだと。「何とかそれをとっておきたいんだ」¹⁷

「ぼく」にとっては洋服ダンスの中に放り込んであるような「使い古しのハンカチ」とか「ゴムが緩くなってもう捨ててもいいようなソックス」といった「不要なもの」も、Aの目（鼻？）には伯母の過去を想起するために欠かせない媒介として映ることとなる。

このAとの出会いをきっかけに、「ぼく」は匂いが過去を、より正確な、より深い過去の記憶を想起させてゆく事を知る事となる。その後、Aは香茅油（伯母の記憶）のお礼にと外国から新たに輸入されてくる香水を「着る」ほど浴びた後の妻とのセックスを、「千載一遇」の経験として「ぼく」に語り始める。Aの話によれば、夫の浮気を心配する彼の妻は、「液体の記憶」を自身の匂いで独占してしまうことによって夫であるAの浮気を防ごうとするというのだった。この妻の試みは見事に成功し、Aの記憶の中の「千載一遇」経験は、どれも妻との情事によって占められてしまっている。

ともかく、俺の目の前に台北じゃ最高ランクの、若くて綺麗な女の子が座っているときにだよ、もしも頭ん中が、紫サテンの下着をつけた（よく憶えてるだろ！）うちのかみさんの姿で占領されたとしたら、いったいこれ以上なにが出来るってんだ？まったくその場で萎えちまうだろうが。それでいいトコ見せてなんて言われても……¹⁸

ここで注目すべきは妻の夫へ対する異常なまでの独占欲でも、またそれを見ず知らずの他人である「ぼく」に滔滔と語るAの奔放さでもなく、Aのこの告白に見られる奇妙な逆転現象にある。つまりAは妻との情事を思い出したくて思い出そうとしているのではない（Aは繰り返しそれを「災難」であると述べている）。にもかかわらず、職場で、あるいは街で、女性たちが身につけている香水の香りをふと鼻にすることで、Aの脳裏には鮮やかなまでに件の香水を「着て」いた当時の妻との情事を思い出してしまうのだ。新婚時代に妻が使っていた珍しい香水を偶然つけていた取引先の秘書の香りを鼻にしたAは、「まったく心が千々に乱れて、危うくその秘書の女の子を愛しちまうところだった」と「ぼく」に告白している。

Aが語るこの「千載一遇」体験は、やがてそのまま「ぼく」の嗅覚に対する態度とも重なり合うこととなる。「ぼく」は、自己の中に眠る無意識の記憶を引き出そうとしながら、意識的にそれらを引き出すことは出来ない。重要なのは「ぼく」が主体的に自己の経験に属するはずの記憶を自由にすることが出来ないでいるという点であり、ここで「ぼく」という主体にとって自己の「記憶」という客体は、いわば制御不可能なものとして描かれているのだ。記憶はいわば「ぼく」の嗅覚を通じて改めて「ぼく」という主体の中へと舞い戻ることとなるある種の「他者」として描かれている¹⁹。

台北という都市をあてどなく彷徨う「ぼく」は、都市に溢れる匂いを無防備に受け入れることでその脳裏には様々な記憶が入り乱れる。それは「ぼく」が「不断に記憶の断層を喚起し続ける

ことによって、一つまた一つと人生におけるかつての共演者たちを思い起こす²⁰作業でもある。自己の内に沈み込んだ無意識の記憶を、その身体（嗅覚）を通じて浮き彫りにすることで、「ほく」は都市の内に潜む廃墟（忘れられた他者たち）の姿をも浮かび上がらせようとする。自己を徹底的に客体化することによってのみ、「人生におけるかつての共演者たち」の姿ははじめて「ほく」の意識へと浮かび上がってゆくのだ。

30年前の初恋の女性の名前を「催眠術師」か「カウンセラー」のようにして引き出してみせたAは悠然として「ほく」に次のように言い放って見せる。

だから別に俺はアルツハイマーとか、万が一何かの事故で植物人間かなにかになっちゃっても平気さ。いざそのときも、看護婦さんのつけている香りを嗅ぐだけで、なんの苦労もなく、映画でも見ているみたいに自分の過去を見ることが出来ると信じているからね²¹。

視覚という最も日常的な感覚器官を使うことなく過去を想起するというAのこの行為は、人間の空間を構成するものが「もっぱら視覚であって、他の感覚は、視覚による空間を拡張し豊かにする働きをしている」（イーファー・トゥアン）に過ぎないと考えられている社会では、かなり特異な方法であるといえるだろう。

このような嗅覚が心に映し出す心象風景に関して、J・ダグラス・ポーティウスは、知覚されたスメル・スケープが「空間的に非連続的かつ断片的なものであると同時に、時間的に偶発的なもの」であり、そこで立ち現れてくる過去の記憶は、時間も場所もひどく混在していることを指摘している²²。このため、匂いによって過去を想起しようとする「ほく」は、それらに積極的にアプローチしつつも同時に「人々の手で修正を加えられ宣伝される記憶というものとあまりにも大きなズレを来す」ほど危険なものとしてその過去を認識している。匂いによって想起される「ほく」の過去が、空間的に非連続的かつ断片的なものであり、また時間的にも偶発的なものであるために、「ほく」の想起した記憶と社会の記憶は必ずしも一致することはない。それゆえに「ほく」はそこに「ズレ」を感じ、それを危険なものとして認識してしまう。両者の記憶は一致することがないゆえに、その落差はより鮮明なものとなって「ほく」の眼前へと浮かび上がる事となる。

陳国偉は朱天心のこのような記憶に対する態度が、歴史に対する彼女独特の懐疑に拠っていることを指摘しつつ、朱天心個人が依然として記憶している過去を書くという行為が、彼女自身を社会の記憶（歴史）へと分け入るためのある種の方法であると述べている²³。人々が台北という都市においてかつて起こった過去を容易に忘れ去ろうとする中で、朱天心は自身が何を記憶し続けているのかを叫び続ける²⁴。それは忘れられただけであって存在しないのではないのだ。それは確かに彼女たちの暮らす台北という都市に潜んだ過去であるのだと。

では、朱天心がこの匂いという手段を用いることで描こうとした過去とはいったいどのようなものであったのだろうか。先述したように、「ほく」にとって最も思い出そうとしながらもそこへ辿り着くことが難しい記憶として、例えば「ほく」が幼少時代を過ごした「婦聯一村」²⁵の名

が挙げられている。その意味で注目すべきは、匂いといった意識的に制御できない身体感覚を通じて想起された記憶がどのような過去であったかであると同時に、その過去がいったいどのような性質のものであったのかという点にある。

このことは、例えば夏目漱石が『それから』において描いてみせた代助と三千代との危うい関係性の中に見出せる類のものに似ている。『それから』における主人公代助は、かつて愛した女性を「義侠心」から友人である平岡へと譲るが、ある日平岡の妻となった三千代が突然百合の花を携えて彼の家へと訪れたことで代助の心は乱れ始める。「好い香でしょう」と百合を嗅いでみせる三千代に、代助は「思わず足を真直に踏ん張って、身を後ろの方へ反ら」してその匂いを避けようとする。三千代はその態度を奇妙に思い、かつて代助自身が百合の花を携え彼女のもとを訪れたことを告げるが、代助本人にはその確たる記憶が残っていない。「貴方だって、鼻をつけて嗅いでいらっじゃありませんか」という三千代の追及に、代助はただ「仕方なしに苦笑」するしかない²⁶。

代助のこの過剰なまでの百合の香りへの拒否反応は、間違いなく無意識のうちに潜む自身の三千代に対する愛情を想起してしまうことへの恐怖、そして現在においてその匂いが誘発する行為、「姦淫罪」を犯しかねないという恐怖がある。

朱天心が匂いというものによって喚起しようとした記憶とは、現在において抑圧されている「ぼく」の無意識的な過去の記憶であり、その意味で想起される過去は必ずしも1990年代の台北という現実において歓迎される性質のものではない。現在の「ぼく」と、無意識的に立ち現れてきた過去の記憶とがある種の緊張関係（「まるで自分が反逆者でもあるかのような気」にさせられる記憶）にあることも、「ぼく」の目（あるいは鼻）が、現在においては想起されることが憚られるような過去の記憶を想起しかねない可能性を持っていることに起因している。そのため、それはただ甘美で郷愁に満ちた追憶だけにはとどまらない。その証拠に「ぼく」はその行為に「ひそかな恐怖感」さえ感じているのだ。

ぼくの微かな記憶によれば、ある外国の作家がこんなことをいっていたような気がする。文学は教化とは無関係である。とはいえ自分は文学は道徳と関わりがないと主張するものではない。そうではなくて、文学が提示するのはあくまでも個人の道徳であるということだ。そして個人の道徳は、それがいかなる人物のものであっても、その人が所属している社会集団の道徳とはめったに一致するものではないのだと²⁷。

こうして「ぼく」は、この「道徳」という言葉を「記憶」という言葉に置き換えて考えてみる。個人の記憶と社会の記憶とが一致することがないと知りながらも、「ぼく」とAは無意識の淵に沈み込んだそれを求めて都市を徘徊する。ときには路上の花の香りを胸いっぱい、またときにはコーヒーショップで働くウエイトレスの腋臭をこっそりと、そしてときには熟しきらない葡萄の果実のおいを吸い込むことで。

朱天心が描いて見せる1990年代初頭の台北は、40年近く続いた戒厳体制の崩壊と急激な本土化

によって大きくその相貌を変化させており、「アイラブ台湾的な流行」が都市の相貌を急激に変化させていく中では視覚を以って過去を捉えることはますます困難となっていた。このような中で「ぼく」はスメル・スケープを広げる事でいったい「何を呼び醒ましたいと、あるいは何を覆い隠したいと」していたのか。

死の直前にいったい何をやりたいかというAの質問に、「ぼく」は迷うことなく幼い頃に過ごした婦聯一村の仲間たちを集めることだと答える。しかし「ぼく」は「フーチョウリー」にあったという婦聯一村の記憶を都市の中に求めながら、中々その記憶へたどり着くことが出来ない。その意味で婦聯一村という記憶は、台北という都市に暮らす「ぼく」にとって最も無意識の根底に沈んだ記憶であり、同時にまた本土化という新たな信仰にとって最も忌避すべき記憶でもあるのだ。

第4節 「人食いの履歴」を持つ「ぼく」

貪欲に鼻をひくつかせながら台北中を徘徊する「ぼく」が、唯一「鼻の力を借りることなく」思い出した出来事。それは昔、婦聯一村に進入してきた浮浪者を「ぼく」と「劉××」が殺したかもしれないという曖昧な記憶について思いをめぐらせているときに突如として浮かび上がってきたものだった。

今夜の風、そして明日の夢。あなたの心の奥には幾つの影が揺れているの？ 出来れば今夜、時間を借りて、夜風を借りて、わたしの愛をあなたの心へと伝えたい²⁸。

それは「ぼく」が昔に見たという映画『上海ブルース』(1984)のテーマ曲「夜風」の一節。戦時下の上海で名も知らぬ女性と10年後の再会を約束した作曲家ドレミは、戦後の混乱した上海で約束の女性を捜し求める。コミカルに描かれたその世界で生活に窮したドレミは出来上がったばかりの曲を自身のバイオリンの調べにのせて奏でる。その旋律はやがて夜風に乗って街全体に運ばれ、「橋の下に肩を寄せ合っているボロ服の乞食や負傷兵、仕事にあぶれたルンペンたち」の耳をそばだて、彼らをネオン輝く上海の街へと誘ってゆく。

映画の見せ場とも言うべき感動的なその場面とは裏腹に、それを思い出す「ぼく」にとってその歌声はただ映画のように甘美でロマンチックな描写にとどまらず、映画の中に現れた「彼ら」のその後をさらに次のように想像してしまう。

その一、二年後、恐らく彼らのうちのかなりの人々が、国民政府に付き従って台湾に渡り、わけのわからぬうちにナンシーチャオかシャンチャンリー、ネイファーに腰を落ち着け、そうして虐殺され、食べられてしまったのではなかったか？²⁹

ドレミが奏でる美しい音色に誘われて、後に「国民政府に付き従って台湾に渡」ってきた「彼

ら」はやがて「外」省人と呼ばれ、国民党政府の指揮の下、戒嚴令体制下の台湾で長らく「大陸反攻」による「反共復国」という歌詞を合唱し続けてきた。「ぼく」の記憶の中で「大陸反攻に成功したら、南京で会おうぜ！」と大声で叫ぶ少年の声は、「彼ら」の合唱への重奏音となって「ぼく」の脳裏へと再来する。しかしそれを回想する「ぼく」自身は、その声がすっかり枯れ果て、意味を失ってしまった30年先の未来にいるのだ。ナンシーチャオ（南勢角）にシャンチャンリー（三張犁）、それにネイフー（内湖）。「彼ら」が腰を落ち着けたという場所とは、1950年代当時、多くの眷村が建設されており、いわば眷村所在地の代名詞のような存在でもあった³⁰。

今夜の風、そして明日の夢、あなたの心の奥には幾つの影が揺れているの？

「ぼく」の脳裏に浮かび上がったその旋律は、匂いと同様に「なんとも懐かし」い思い出を「ぼく」の意思とは無関係に想起させてゆく。そこに浮かび上がったのは、白光や周璇といった当時の人気女優たちが歌った流行歌を口ずさむ「ぼく」の母親たちであった。そうして回想された母親たちの記憶は、床一面に散乱していた布の切れ端やら糸くずやらが放つ「大量の唾液」と「一番年下の子供の小便臭い」匂いによって、より鮮明に「ぼく」の脳裏へと舞い戻ってくる。しかしそうして回想された眷村の母親たちの記憶と、『上海ブルース』で現れた橋の下の乞食や復員兵たちの運命を、「ぼく」は不思議と重ね合わせずにはいられない。

彼女たちは、故郷の家族親戚からとっくの昔に忘れ去られ、この島に根をおろして住み着いた孫子の代からも、理解も同情もされなかった……。借りてきた時間、借りてきた夜風。いまやあの彼女たちも、大半はなくなってしまったに違いない³¹。

「故郷」での暮らしを追われた彼らがたどり着いた先にあったもの。それは眷村と呼ばれる仮初の住まいであり、大陸の「故郷」での生活を想う彼らにとって、それはさながら「夜風」で唄われたような「借りてきた時間」を過ごすようなものであった。北は石門から南は恒春まで、戒嚴令期に台湾各地に900村近く建設された眷村には同様に、北は黒竜江から南は雲南まで大陸全土の様々な省籍の外省人たちが暮らしており、そこではかつて様々な「濃厚な眷村の匂い」³²に満ちた世界が広がっていた。しかし台北という「廢墟に廢墟を重ねた」都市において日常を送る「ぼく」は、かつて自らの世界を取り巻いていたはずのこの匂い（眷村気味兒）をどうしても思い出すことが出来ない。

短編小説『想我眷村の兄弟們（眷村の兄弟たちよ）』（1992）において、日々の暮らしの中で挫折を感じる度に主人公の「彼女」／「あなた」が口にした「眷村の兄弟たちは、いったいどこへ行ってしまったのだろう」という問いかけは、たとえそれが1990年代の台北において「反逆者」としてのそれであったとしても、「ぼく」にとって何にもまして呼び醒ましたい記憶となって立ち現れる。

しかし、嗅覚や聴覚といった身体感覚を以って不可視化された都市の廢墟を嗅ぎ分けようとす

る「ぼく」は、Aと共に台北を徘徊する以前には不思議と眷村人たちの姿を思い出す事はなく、唯一「ぼく」が彼らを日常の中で思い出したのは数年前に「新聞の社会面で、日本人の子供を誘拐して足がつき、死刑になった」という「劉××」のニュースを見かけた時だけだった。犬を殺し、鼠を殺し、蛇を殺し、猫を殺していた「劉××」。「ぼく」は曖昧な記憶を手繰り寄せる中で、「劉××」がそのうち人間を連れてきて絞め殺し、「ぼく」たちがそれを食べてしまったのではないかと気が気でなくなる。

そうして「ぼく」は、水害後に大移転を始めた頃の眷村で何人かの人間が行方不明になっていたことをふと思い出す。村の公衆便所で「死んだ鼠のような悪臭」を漂わせて死んでいた孫家のチビ助、大漢溪に浮かび上がり、「オチンチンやら耳たぶやらをすっかり魚に食いちぎられていた」盼盼の兄さん、それに「独り者で、ゴミ箱あさりをしていた」老士官のオジサン。「ぼく」は命を落とし、また行方知れずになった彼らのその後をどうしても思い出すことが出来ない。

……そういえば劉××が母親に言われて残飯をあげるとき、ついでに浮浪者の事をからかっているのを見たことがあった、……もしや、もしやあの浮浪者はぼくたちに絞め殺されたのではあるまいか？老士官のオジサンは？孫家のチビ助は？……³³

個人の記憶と社会の記憶とが一致することがほとんどない現実において、「ぼく」が彼らの事を思い出せなかったことはある意味で当然だともいえる。なぜなら現実に暮らす大部分の者たちにとって「反逆者」となることは容易なことではなく、彼らは自らの記憶と社会の記憶を擦り合わせることで、重なり合わない記憶を無意識の淵へと押し込め、新たな信仰と自らの過去の間に折り合いをつけようとするからだ。

やはり、有用な記憶だけを残すに越したことはない。さもないとあまりに危険すぎる。

作中において幾度にもわたって繰り返される「ぼく」のこの眩きは、新たな信仰を生きるマイノリティが、社会に対する自らの「反逆」を無意識のうちに自己抑圧している怯えのサインだともいえる。その点において「ぼく」は死んでしまった彼らの兄弟（被抑圧者／被害者）でありながら、同時に彼らの過去を押し潰す新たな信仰の共犯者（抑圧者／加害者）のポジションにも立っている。

仮初の「故郷」で仮初の時間を過ごしていた『上海ブルース』の「彼ら」が、「虐殺され、食べられてしまった」のではなかったかと推測する「ぼく」。しかし彼らを虐殺し、食べてしまった者たちとはいったい誰を指しているのか？社会の記憶と重なり合わない個人の記憶を「危険」なものとして切り捨て無意識の淵へと沈めてしまった「ぼく」は、ある意味でそれを抑圧しようとする信仰とは共犯関係にある。社会の記憶と個人の記憶がかろうじて重なり合う結節点において日々を生きる「ぼく」が身体的な記憶によって「危険」な無意識の記憶を探り出そうとする事は、懐かしさとともに加害者としての自己と向き合うことでもあるのだ。

かつて魯迅は『狂人日記』において村人たちが自分の人肉を食べようとしているのではないかという疑心に囚われた「被害妄想狂」の「私」を描いたことがあるが、しかしその「私」は物語の終局において自身もまた「人食いの履歴」を持っていたことに気付く。それによってそれまで明確であったはずの食う／食われるといった関係は突如として崩壊し、「私」は自身の加害性思わず愕然とし、次代へと希望を託そうとする。しかし物語の冒頭においてこの「狂人」の病はすでに癒え、「いまは某地に赴き任官を待っている」とされており、「狂人」であった「私」はすでに社会へと復帰していることが示唆されている。それゆえに「私」はかつての自分が人食いの履歴を持っていたという疑念をものは抱くことはない。そしてそれは同時に「<狂人>の世界が再び<常人>社会のペールで隠蔽」³⁴されてしまった状態でもあるのだ。

『狂人日記』における「私」と同様、「ほく」もまた自身の中に「人食いの履歴」が存在することに気付き、それが本土化の進む社会の中で「常人」として生きるために自身が虐殺し、食べてしまった「かつての人生の共演者たち」である事を知る。しかし「常人」として生きる「ほく」は、そうした自身の持つ加害性を想起することは出来ても、正面からそれと向き合い続けることは出来ない。そのため「ほく」は「私」のような「狂人」とはならず、ただ幼い頃に共に遊んだ婦聯一村の仲間たちを再び呼び集めようとする事で「狂人」と「常人」の狭間において日々を生きようとする。それは「廢墟に廢墟を重ねた都市」で生きる「ほく」が成し得る唯一の償いの方法でもあったのだ。

第5節 被害／加害者関係を越えて

先に述べてきたように、社会の記憶と重なり合わない自己の記憶を身体的な記憶によって想起させてしまった「ほく」は、そのことによって自身の「人食いの履歴」に気付き、その加害性を知ることとなる。しかしここで「ほく」が感じる加害性とは、あくまでも眷村という内部の人間に対して向けられたものであって、それが眷村外部の人間（本省人）に対するものではないことは明らかだろう。つまり「ほく」の感じる加害性とは、本土化が急激な勢いで進行する1990年代の台北という都市において忘れ去られようとしている眷村人たちに対する加害性であって、反共復国の前線基地としての眷村が戒嚴令期に果たした「既得利益階級」としてのそれではないのだ。

この加害の内向性は、果たして朱天心の眷村描写といったものが「断裂」以前におけるそのように、あくまでも眷村内部の人間に向けて発せられるような眷村文化の特殊性や自身の甘い郷愁を描くものから抜け切れていないことにその要因があるためなのだろうか³⁵。あるいは、あえて被害／加害者関係を単純化させないことで、戦後冷戦体制下における図式化された支配／被支配関係性を打ち壊そうと企図したものであったのだろうか。この問題は『ハンガリー水』という物語を、朱天心がいったいどのようなポジションから、誰に向けて発しようとしていたのかという問題であるとも言い換えられるはずだ。

『ハンガリー水』（1995）に先行して発表された短編小説『眷村の兄弟たちよ』（1992）におい

て、主人公である「彼女」／「あなた」は、「尋ね人の広告を出してもいいから幼い頃の眷村の兄弟を探したい気持ちを嘔う気にならない」と述べ、新聞の社会面で時たま出会ってしまうような「わずかな手がかりだけで一目でそれと分かってしまう兄弟」以外の眷村人たちの姿を都市の中に求めようとしている。「濃厚な眷村の匂い」を都市の中に嗅ぎ出そうとした「彼女」／「あなた」のこの欲望は、後に描かれる『ハンガリー水』における「ぼく」のそれと一致しており、王徳威は眷村生活の思い出に満ちた『眷村の兄弟たちよ』が、後に描かれた『ハンガリー水』と並べて読むことが出来るのではないかと指摘している³⁶。

『眷村の兄弟たちよ』において、カメラワークを操るようにして複数の主体を使い分け、眷村の多彩な過去の物語を描いてみせた朱天心は、「既得利益階級」としての眷村人たちに投げかけられる社会の偏見の目に対し、様々な形で反論してみせている。そこでは、朱天心は眷村人の加害性といったものを真っ向から否定しており、主人公である「彼女」／「あなた」は、かつてのような彩と清純に満ち満ちた「大観園」³⁷としての眷村を描かない（あるいは描けない）代わりに、社会の眷村に向けられる偏見といったものに微細に反論してみせている。謂わば、そこからは眷村へのある種の自己批判を通じてその弁護を請け負おうとしている姿勢が見て取れる。

しかし、その連作として描かれたはずの『ハンガリー水』において、このような眷村に対する自己批判や弁護といったものはすっかりその姿を消し、また主人公の加害性を責めたてるような他者としての本省人もそこには登場しない。そこで代わって登場するのが、本省人という点を除けば「年齢、容貌、職業とも」「ぼく」とほぼ似通った存在としてのAである。

周英雄の指摘によれば、1990年代以降の朱天心作品においてしばしば登場するこのAという人物は、常に主人公を導く相談役のような存在として描かれており、『ハンガリー水』においても同様にAは豊富な知識と経験を以って「ぼく」に匂いによって過去を想起する方法を教えているという³⁸。

しかし、『ハンガリー水』におけるAは、ただ一方的に「ぼく」に過去を想起する方法を教える教師のような役割を負っているわけではない。むしろ「ぼく」という存在（正確には「ぼく」の服に付いていた香茅油の匂い）がなければ、Aもまた30数年前の過去に沈んだ伯母の記憶を想起することは出来ず、過去の失われた記憶へと辿り付く術を知ることはなかったかもしれないのだ。そのため、Aなくしては「ぼく」が自身の記憶の淵に沈んだ過去を想起することが出来なかったように、Aもまた同様に、「ぼく」の存在なくしては消え去りつつある自身の記憶を想起することは出来なかったのだ。

「ぼく」との会話の最中にAが突然口ずさむ「ラモンナ」という歌は、かつて銃殺刑に処されたという彼の伯父の親友が好んで聴いていた「不幸の歌」だという。戒厳令期に銃殺刑に処された本省人の記憶が、30年後の未来に「ぼく」という外省人男性との会話によって想起され、そして口ずさまれるという偶然は、それが偶然である限りにおいて外省人である「ぼく」への憎悪や怨恨の形としては現れない。なぜなら「ぼく」という他者の存在がなければ、Aはその「不幸の歌」を永遠に口ずさむことはなかったかもしれないのだから。それは「ぼく」がAと出会う以前には不思議と眷村の兄弟たちを思い出すことがなかったことと似ている。その意味で、「ぼく」

とAとの関係は、「ほく」のAに対する一方通行的な依存関係というよりも、むしろ互いの満ち欠けた過去を相互補完するためのパートナーのような関係性であると言った方が正しいだろう。

「ほく」とAは失われた過去の記憶の相互補完的なパートナーとして、台北という都市を徘徊する。外省人の「ほく」と本省人のAは、「年齢、容貌、職業とも」似通った経歴を持つにもかかわらず、その省籍の違いゆえに異なった歴史意識（過去）を背負って日々を生きている。しかし、朱天心はこの異なった歴史意識を、『眷村の兄弟たちよ』におけるそれのように、省籍矛盾という現実の政治対立の物語へと収斂させることなく、むしろ異なった歴史意識を持つ人間同士の交渉によってこそ、自己が無意識のうちに隠蔽してしまっている記憶を想起させる契機となることを示唆している。そして、そういった記憶こそが、「あの隠された、眠ったままの、未だ誰にも発見されていない」記憶であり、また「それがいかなる人物のものであっても、その人が所属している社会集団の記憶とはめったに一致するものではない」「反逆者」としての記憶であるのだ。ここで言われる「いかなる人物」の間に、本省人／外省人の別がないことは明らかだろう。

物語の終局において、「ほく」とAが共同でそれぞれの失われてしまった過去を求めるために新聞広告を掲載しようとするのは、ある意味で対立を超えた和解の物語を朱天心が提示しているように見える。両者の異なった過去は交わることはないものの、それでもそのパートナーなくしては廢墟を幾重にも積み重ねた台北という都市において、「ほく」もAも容易にその行路を見出すことは出来ないのだ。

朱天心という作家が「断裂」以降も眷村というテーマを描き続けるのは、ただ過去への「愛好」や「未練」といった郷愁感からだけではない。かつて自らの臍の緒と国家の胎盤を結びつける媒介として機能していた眷村という過去を、あえて「アイラブ台湾的な流行」が蔓延する社会に提示することによって、朱天心は本土化や民主化といった新たな信仰の形が「ほく」のようなマイノリティに「かつての人生の共演者たち」を無意識のうちに殺害させ、またその肉を食べざるを得ないような状況を生み出していることを描き出そうとしてきたのだ。そして一方で、それらを他者との交流によってのみ表象することが可能なものとして描き出すことで、社会に亀裂を生み続けてきた省籍矛盾という対立の構図を乗り越え、両者が和解へと至る術を提示しようとしたのではなかったのだろうか。

身体的な記憶が喚起する自己の無意識的記憶というブルースト的モチーフを用いたこの『ハンガリー水』という物語は、1990年代の台北という都市を生きる朱天心が企てた新たな眷村文学の試みであったと言える。そこでは眷村という過去は決して前景には現れず、また梁小琪や小蝦のような愛国少女も、あるいは「彼女」／「あなた」のような弁護人としての眷村人たちも登場しない。しかし、そこには確かに「断裂」を経験し、また信仰に「幻滅」した朱天心という作家が眷村という過去を通じて眼差す台北という都市の一個の表象の形が見て取れるのではないだろうか。

注

- 1 日本国内における『古都』に関する研究論文としては、訳者である清水健一郎の「〈記憶〉の書」(2000)を始め、星野幸代の「草木は語る都市の記憶－朱天心『古都』－」(2002)、坂元さおりの「川端康成と朱天心、二つの古都－暴露／隠蔽される暴力の所在－」(2004)、黄英哲の「歴史・記憶とディスクール－朱天心『古都』論」(2008)などがあげられる。
- 2 三三集刊は1977年に成立した文学団体で、その発起人としては朱天文、朱天心、馬叔礼、丁亜民などの外省人二世世代の若い作家たちが中心となっている。三三の由来としては、中華民国の国是である三民主義にキリスト教における三位一体説の二つの三を組み合わせたものだとされており、成員たちの多くは文学的には張愛玲や胡蘭成らの影響を強く受けていた。また文学活動以外にも、保釣運動や中華文化復興運動などといった現実政治へのコミットを積極的に試みていたことでも知られている。
- 3 朱天心『方舟上的日子』(聯合文學、2001年)、47頁。
- 4 朱天心『擊壤歌』(聯合文學、2001年)、190頁。
- 5 1990年代における朱天心の最初の小説集となった『想我眷村的兄弟們(眷村の兄弟たちよ)』(1992)において、主人公たちの置かれた立場はどれも多様でありながら、一貫する点はそのどれもが社会的マイノリティとして認識されている者たちばかりであったという点にあるだろう。新たな現実うまく適応できない政治的受難者(『従前従前有个浦島太郎』)に家庭に閉じこもる主婦(『袋鼠族物語』)、前世の記憶を持ちながら死の瞬間を待ち続けるという老靈魂という名の憂鬱症患者たち(『預知死亡紀事』)など、その作風とテーマは以前の朱天心の叙述方式から見れば大きな変化があったことが見て取れる。
- 6 詹宏志に関しては、朱天心『我記得…』(聯合文學、2001年)7頁を、邱貴芬に関しては『(不)同國女人』聒噪(元尊文化、1998年)147頁を参照。
- 7 國防部史政編輯室『國軍眷村發展史』(國防部史政編輯室、2005年)、1頁。
- 8 代表的なものとして、高雄に建設された「誠正新村」や新竹に建設された「東光新村」があげられる。前者は旧日本陸軍宿舎を改築利用したものであり、また後者は警察学校の宿舎を利用したものであった。國防部史政編輯室『國軍眷村發展史』(國防部史政編輯室、2005年)、5頁。
- 9 朱天心『小説家的政治周記』(聯合文學、1994年)、181頁。
- 10 『眷村の兄弟たちよ』の冒頭部分において、主人公である「彼女」は村の入り口にある大石柱にかかった横断幕に「本村は×号候補×××を支持する」と書かれた文字を目撃している。
- 11 朱天心『古都』(印刻出版社、2002年)、44頁。
- 12 「断裂」以後に朱天心が眷村をそのテーマとして描いた作品としては、1992年に発表された『眷村の兄弟たちよ』、また1995年に発表された『ハンガリー水』等がある。また、「断裂」以前に朱天心が最も具体的な形で眷村をそのモチーフとして取上げた作品としては、台北郊外のとある眷村で暮らす夏家の三姉妹の成長を描いた『未了』(1982)があげられるだろう。他にも眷村を作品の情景として描いたものとして、『一二三木頭人(だるまさんが転んだ)』(1974)、『長干行』(1975)、『昨日當我年輕時(若かりし頃)』(1980)などが、また追憶対象として描いたものとしては『天涼好個秋(涼しき秋)』(1978)、『天之夕顔』(1980)、『時移事往(移りゆく時の中で)』(1984)、『遠方的雷聲(遠方の雷鳴)』(2000)などの作品があげられる。
- 13 『聯合報』、1997年11月10日、14版。
- 14 朱天心(清水賢一郎訳)『古都』(国書刊行会、2000年)、53頁。
- 15 林耀徳「都市廢墟本質論」(『中時晩報・時代文學週刊』、1994年4月3日)。
- 16 彭婉蕙「消逝、重塑、轉換－論朱天心的都市書寫」、『中極學刊・第四輯』、2004年12月。
- 17 朱、前掲『古都』、157頁。
- 18 朱、前掲『古都』、164頁。
- 19 岡真理は、自身のエジプト留学時代に口にした洋梨の味を日本で口にした際に、自身でさえも忘れていた当時の記憶がありありと浮かび上がってきたことについて述べ、それを「到来する記憶」と呼び表している(岡真理『記憶／物語』岩波書店、2000年)。岡はこの経験を元に、記憶といったものが「わたし」の意志とは無関係に「わたし」へと到来する事を指摘し、そこでは記憶こそが主体であり、「わたし」は徹底的に無力であり、また受動的であるとし、記憶の回帰とはいわば暴力的なものであると述べている。その意味で自身の身体感覚を以って過去を想起しようとする「ぼく」は、記憶の回帰を心から切望しながらどこかでそれを恐れているようにも見える。

-
- 20 陳國偉「遺失地址的理想國－朱天心小説中的記憶烏托邦」（『淡水牛津文藝』、1998年10月）、56頁。
 - 21 朱、前掲『古都』、173頁。
 - 22 米田巖・湯山健一訳編『心の中の景観』（古今書院、1992）、118頁。
 - 23 陳國偉『遺失地址的理想國－朱天心小説中的記憶烏托邦－』（『淡水牛津文藝』（1998年）、61頁。
 - 24 1989年の朱天心の小説『記憶の中で』の中国語タイトルは『我記得…』であるが、これを直訳すれば『わたしは…を覚えている』となる。「…』とは朱天心個人の過去の記憶を指しており、また公の記憶（歴史）が忘れようとしている過去の記憶でもある。
 - 25 眷村の建設時期とその種類にはいくつかの区分が存在しており、「ほく」が過ごしていたというこの婦聯一村は、その名称からおそらく新眷村時期（1957～80年）と呼ばれる時期に、宋美齡が当時主任委員長を務めていた中華婦女反共抗ソ聯合会による基金によって成立したものである。郭冠麟主編『國軍眷村發展史』（國防部史政編集室、2005年）、7頁。
 - 26 夏目漱石『それから』（新潮文庫、2007年）、143頁。
 - 27 朱、前掲『古都』、185頁。
 - 28 朱、前掲『古都』、200頁。
 - 29 朱、前掲『古都』、200頁。
 - 30 鄭政誠の指摘によれば、1950年代初期に人民解放軍の台湾侵攻を恐れた国民党政府は一連の防空疏流政策を実施することによって国軍部隊を台北市内ではなく、その周辺地域へと展開することで空襲被害の軽減を図っていたという。（鄭政誠『三重埔の社會變遷』（臺灣學生書局、1996年）、46頁参照）この政策によって国軍部隊の多くは板橋や内湖、南勢角といった台北の周辺地域へと散開することとなり、それに伴って多くの眷村が台北郊外に建設されることとなった。
 - 31 朱、前掲『古都』、202頁。
 - 32 『眷村の兄弟たちよ』において主人公の「彼女」／「あなた」は、物語の冒頭近くにおいて眷村内に広がる独特の匂いを、家庭からあふれ出る中国各地の家庭料理の匂いで表現している。
 - 33 朱、前掲『古都』、194頁。
 - 34 北岡正子『魯迅 救亡の夢のゆくえ』（関西大学出版部、2006年）、121頁。
 - 35 朱雙一は1980年代前後に登場してきた眷村作家たちの描く眷村が、どれも作者自身の幼少時代の清純さや幼い感性を強調したような自伝的文体のものが数多く見られた事を指摘しており、その代表的な作品として朱天心の『未了』（1982）と蘇偉貞の『有縁千里（まためぐり逢うまで）』（1984）をあげている。そこで朱雙一は、両者の作品に共通するものが眷村における特殊な価値観や美意識の強調であり、眷村文化そのものの提示であったことを述べている。朱雙一『戦後台湾新世代文學論』（揚智文化事業股分公同、2002年）、201頁。
 - 36 王徳威『後遺民寫作』（麥田出版、2007年）、212頁。
 - 37 「大觀園」とは一般に清代の長編小説『紅樓夢』に登場する賈家の豪邸を意味するが、黄錦樹はこれを「断裂」以前の朱天心文学に共通するある一つの特徴であるとしている。賈家の公子、賈宝玉と彼に想いを寄せる美少女たちが華やかな日々を送った豪邸としての「大觀園」は、外部の世界からはある種切り離されたユートピア的空間であったが、黄錦樹の指摘によれば、それは眷村という閉ざされた空間の中で「純潔」や「誠意」といった概念を基に様々な愛情や純情に関する物語を描いてきた朱天心の作風と酷似しているという。その意味で、純粹と彩りに満ちた世界としての眷村という記憶は、長らくの間、朱天心にとっての「大觀園」であったといえるだろう。
 - 38 周英雄、劉紀蕙編『書寫台灣－文學史、後殖民與後現代－』（麥田出版、2000年）、411頁。

